



さて先月は足尾でうだうだと飲んできたと書いた。それから、世のため人のための活動したり、青少年諸君と白州へキャンプに行ったりしているのに、本日もまた山奥で飲んだくれてきたと書かねばならんことはまことに不本意であるが、しかたないのである。

友人と二人で12キロ程度歩いていつものねぐらに向かいます。最初に水辺に出てすぐに、おにぎりワンカップで腹をこしらえる。いつもより水量があるなと思ったが、封鎖された道の脇の斜面を下りきると、川原は渡歩するしかないのははっきりしていた。あとは靴のまま水に入る

るか裸足になるかだけの問題。このあとまだ何キロも歩くのだから、裸足になって流れに入ってしまったが、普段足の裏なんてのはまったく鍛えていない、ぶよぶよなものだから、痛くてどうしようもない。ワーとかギャーと叫びながらなるべく大きな岩や砂を探してさかのぼってゆく。小さかったころいつも裸足で遊んでいて、大人たちから履物を履くように怒られ続けていたが、あのまま育っていればこんな苦勞をしないですんだのだ。ネパールのポーターたちのかさぶたの塊ようになった足の裏を思い出す。

まあ、結局今回は6回の渡歩をしたが、しまいには「あー、いいですよ、裸足になればいいんでしょ、わかってます。」と当たり前のように流れに入ってゆくようになるが、痛みはどうしようもない。今度は地下足袋かサンダルの用意をしよう。しかし、上流は数百メートルも川原が広がっているのに、核心部は数メートルにまで岩の間に押し詰められて流れ下る水流の勢いは見飽きない。沢の出会いには、ほとんど濁流と土砂の押し出しのあとが見られ、悪天の時など歩けるもんじゃあないのは一目瞭然で、その破壊力の跡に戦慄する。途中の沢からカラカラと小石が飛んできたが、見上げると小鹿が3頭上流へ逃げ去っていくところであった。まあ、熊が3頭向かってくるよりもすごくよい状態だ。のんびりと小屋に向かう。小屋の裏の清流でさっぱりしてから流れに足をつけて晴れ上がってゆく空や緑の山々を見上げながらウイスキーをついたカップに流れの水をすくい、じつにうまい水割りを飲む。幸せなのだ。小屋の前の草原に移って日本酒をかえて夕飯の用意にかかるが、おでんのパックを温めて何でもかんでも放り込んでしまうのが基本だからどうにでもなる。「死ななきゃいいんだから気楽でいいなー。」などと言いつつ、どこまでが飯でどこからが宴会かわからないまま、心楽しく夜はふけていった。

早朝、きれいに晴れてきて月が真上に輝いている。コーヒーを飲み、キュウリをかじり、うどんを食って、またザックをかついでゆっくり出発したが、ふと見ると、草むらに友人の杯が転がっていた。「て、ことは、なくなっていた箸もあるんじゃないか。」と探し回ると見事全部出てきた。「良かった、良かった。」と喜び合うが、同時に、昨夜この草原全体を縦横無尽に走り回り、踊りまわり、大の字になって転がって笑いあった二人のおとつあんの様を一気に思い出してしまった。今月もまたのんべのまま終わってしまった。清く正しく生きたいものだ。